

## 【書評】

福居 純著 『デカルト研究』（創文社、一九九七年）

浅沼光樹

### 一

本書についての書評を執筆する機会が与えられたのは、もう暫く以前になる。したがって、あらかじめその準備をこなう暇がなかったなどと言うことはできない。しかし、思索への素質も学識も乏しいことに加えて、生来の怠惰に思慮もなく身を委ねているうちに、準備に費やされるべき時間も、何ら有効に用いられることのないまま、徒に過ぎ去ってしまった。その結果、評者はいまだ評者と名乗ることのできない状態にあり、そうで

あるからには、本来ならば、評者は本書評の執筆を辞すべきなのである。しかし周囲の状況がそれを許さない。遺憾ながら、評者は評者としての資格を欠いたまま、本稿の執筆のための筆をとり、おそらくはそれに相応しいように、ただ本書の周辺を徘徊して終わる、ということにならざるをえないのであろう。

### 二

しかしそのようなことは、いまここでことさらに申し立てるまでもないことな

のではあるまいか。つまり、評者には、評者としての資格などそもそも最初のあたりはしなかったのではないか。なしる書評の対象として取り上げられているのは、デカルトの『省察』に関する高度に専門的な研究である。そうであるならば、著者と研究分野を同じくし、それについて長らく研鑽を積んだ人物こそが評者に最適であるのは、いまさら言うまでもないことであろう。だが評者はと言えば、書簡を含むデカルトの著作および遺稿、さらにはその主要な研究書に取り

組んだと言える経験もなく、しかもその縫いがちな思考の覚束ない足取りでは、本書の著者の強靱な思索についていくこともままならない。そのような人物に、どうして評者がつとまるであろうか。

### 三

だが思い起こしてみれば、はじめから著者と評者との間にある学問的な実力の格差は歴然としており、その甚だしきは、評者のような者にも、短期間にそれを埋めることができると思ふことを、たとえ一瞬であっても許すものではなかった。ただ、実行に移すことこそできなかったものの、不可能だと分かっていたとしても、評者であろうとする限りは、その懸隔を埋める努力を怠るべきではない、と考えたまでのことである。

### 四

けれどもそのように、この書評を引き受けたときにもうすでに自分が最適の評

者ではないことを自覚していたのだとすると、それにもかかわらずその役を引き受けたのは、いったいどういうわけなのか。それが単なる気まぐれによるものではない、とするならば、そのとき評者の脳裏には、あるいは幽かな幻のようなものではあっても、自分自身が何らかの意味で評者たりうる可能性がよぎった、というのでなければなるまい。

### 五

いや、断じてそのようなことはありえない、と言うであろうか。なぜなら、評者はドイツ観念論の研究者であるのだから、と。それだけならばまだしも、評者はそのうえ、いついかなる局面においても、ドイツ観念論の研究者であることに徹しようとしており、あくまでもそこに自己の哲学的立場を定め、そこからいっさいを眺め、かつ論じようとしているのである。そのような人物に、いったいどのようにすればデカルトとの接点が生じ

うる、と言うのであろうか。

### 六

しかし、どうしてそのように考えるのか。もちろん、この問いに返答できないなどと言うつもりはない。だが、そのとき口をついて出てくるのが、自分でも思わず赤面せざるをえないほどに陳腐な決まり文句の羅列でしかない、とするならば、どうであろうか。そのときには、いったんそこで立ち止まり、例えば、次のように疑ってみるのも悪くはないのではないか。これまでわれわれは、そのように考えてきたのであり、まさにそうであればこそ、いまここでもまたそのように考える、ということにすぎないのではないのか、と。言い換えるならば、われわれのデカルト理解の成立の過程のうちに、同時にドイツ観念論の哲学者に対する評価と態度決定とが含まれており、それが一つの隠れた原因として働いているがために、デカルトについて理解するという

ことが、ただちにそこに、ドイツ観念論の哲学者についての何がしかの理解を引き入れずにはおかない、ということなのではないか、と。

七

そのような観念に立つてみた場合、もしかするとわれわれは、われわれのデカルト理解が一冊の書物によって決定づけられたのではないか、という考えに到りつくことになるかもしれない。そしてここに、いったいいつから、われわれはドイツ観念論の哲学者とデカルトとの間に揺るがしたい境界線が引かれていて、それを踏み越えるということが、思索の在り方の全面的な転換を伴うものと考えようになったのか、という問いに対する一つの答えを見出しうるのではあるまいか、という予感に襲われるかもしれない。

八

この顛動をやめない予感にうながされるがままに、すぐにでも本格的な探索に乗り出し、その全体的な脈絡をあきらかにしたい、という衝動に駆られたとしても不思議ではあるまい。しかし、このようにしてこの書物を、それ自体としての内部に外部を包含するものとして、その意味で、いわば一つの現実を創設するものとして理解しようとするや否や、われわれはそれが無に根ざしているのではない、という事実に突き当たらざるをえない。言い換えると、ここでわれわれが見出さざるをえないものとは、この書物の背後にある、さしあたって容易には解きほぐしがない、いやが上にも錯綜する連関なのである。

九

いまここでわれわれが直面しているこの連関を、われわれの哲学的伝統と呼んだとしても——それ実際にそのような呼称が与えられ、単なる回顧の、という

にとどまらず、学問的考察の対象とされようとしている時代においては——特別の弁明を必要としないであろう。だが、そうすると、われわれはここでいったい何をおこなった、ということになるのだろうか。つまり、なるほどここでは、いまわれわれが着手しようと考えたその試みが、このまさに進行中の作業のうちへと、ただ単に一方的に帰属しているように見えるかもしれないにしても、果たしてわれわれは、現在なされつつあるこうした哲学的伝統の回顧にわずかに一個の洞察を、すなわち、われわれの哲学的伝統の解明には、われわれの哲学史理解の伝統の解明が不可分に結びついていなければならず、後者を欠いては前者は完全なものたりえないという洞察を——それ自体はたしかに意味のないものではないと言えるにしても——付け加えたにとどまるのであろうか。

十

けれども、これを直視するという以外に、つまり、このようにして哲学史理解の伝統と哲学的伝統とがそこにおいて、またそのうちへと不可分に織り込まれているものとしてのわれわれ自身を直視する、という以外に、事の真相を見極めうるためのいかなる手段がありうる、というのだろうか。さらにまた、この直視のうちには、この直視がいかなる直視であり、この直視がいままさに可能になったのはいかにしてであるか、ということへの問いもまた含まれていない、などということがありえようか。

## 十一

しかしそうすると、いったい、このようなかたで自己自身へと到来する過程において、最終的にわれわれが見出すものとは何なのか。一つの時代の完全な経過と、それに伴うわれわれの精神の成熟、そしてこの到来がまさに自覚であるということ、言い換えると、そこに見出され

るものがわれわれの哲学的伝統であり続けている以上、われわれは実際にこの外部に出るようにしてそれを分析することができないということ、その意味でいわば分析が同時に総合でもなければならぬ、ということが、そこには含まれていなければならないであろう。言い換えるならば、われわれがわれわれ自身に目を向け、それを直視しようとするにしても、その試みを完遂させるには、われわれの眼差しは少なくとも自己意識を背後から支えるものにまで、すなわち、われわれが自ら変貌しようとするその意志にまで達している、というのでなければならぬであろう。

## 十二

さて、もしそうだとするならば、一般に《移行期》とか《過渡期》などと呼ばれているものうちに、つまり、急速な衰退の意識が醒めてゆくなかで、その弛緩した諸契機を「可能性」と転じようとす

る意志の激しい昂揚のうちに、われわれはいる、ということになる。だが、そうすると、評者がただドイツ観念論の研究者に徹しながらも、いわばその果てにデカルトの影を見出すということも、ありえないことではない、ということに当然なるであろう。なぜならば、すでにわれわれは、そこにおいてはわれわれの哲学史理解の伝統とわれわれの哲学的伝統が不可分であり、そのようにして生成を続けていかざるをえない、このいまだ解明されざる巨大な連関のなかにいるのだからであり、しかるにそこでは、あきらかに、どの契機もが、そしてそのいかなる組み合わせもが、自己を現実化するための権利を等しく持ち合わせているように思われるからである。

## 十三

しかしながら、その場合には、たしかに評者は評者固有の立場を堅持しながら、なおかつ本書の評者たりうる可能性を手

に入れるもの、もしかすると、それと引き替えに、無数の事例のなかの単なる一事例として、場合によっては、中心から一挙に辺境へと追いやられてしまう、ということに、結局はならざるをえないのではあるまいか。つまり、所詮この試みは、過渡期の混沌のなかに現れては消えていく無数の泡沫の一つにすぎず、まさにその意味で新しい伝統を形成していく創造的行為の一つでありうるという資格を、かろうじて手に入れるというにすぎないのではないか。

#### 十四

いや、断じてそうではない。そのようなことはありえない。少なくとも関係項の一項に関しては、すなわちデカルトに関しては、絶対にそうであってはならない。なぜか。それは、われわれにとつて近世哲学は宿命だからである。

#### 十五

われわれが最初に遭遇したのが近世哲学以外ではなかったというのがその意味である、というように理解してもらっておかまわぬ。だが、それだけでは、なぜ近世哲学がわれわれにとって宿命になるのか、その理由は分かるまい。その意味を理解するには、まずはこの同じ事柄が次のような意味において、つまり、いまでもなお、われわれは近世哲学を通してでなければそもそも哲学というものに触れることができない、という意味において把握されるべきであり、さらには、このように近世哲学が自らを介してわれわれをして哲学一般に接触可能たらしめるという構造をそもそも備えている、ということが、近世哲学のこの構造それ自体を単なる前提たらしめ、かくして、そのものとして問われることなく放置せしめ、終いには、それを忘却させることにならざるをえないのだ、という洞察にまで、最初の意味は精錬されなければならぬのである。

#### 十六

それでもまだ宿命という言葉の意味を説明しなければならぬであらうか。この事実を目をふさいでしまい、もうすでに近世哲学の外部にいろのだと、そのようなことが可能であるのだと、無理矢理に自分に思いこませようとしても無駄である。なぜなら、いまわれわれが直面している課題は、あえてそれが試みられない限りは、決して成し遂げられない種類の事柄に属するからである。もちろん、この課題の存在そのものを否認し、そのようにしてそれを放置しておくこともできる。しかし、その場合にわれわれが陥ることになる状態を（呪縛）と呼ばずして、ほかにいったい何と呼べばよいのであろうか。

#### 十七

しかし、このようなしかたで近世哲学がわれわれにとって呪縛であり続けてい

るのも、そもそもそれが問われることなく捨て置かれ、したがってその本質が洞察されずにいるからなのである。だとすると、この呪縛から逃れるには、われわれはこのような態度を自らに禁ずることから始めなければなるまい。つまり、

## 十八

き次元を——創設したのはデカルトであるという通念が、その否定の可能性も含めて再検討されるという方途である、ということも疑いえないのではないか。

## 十九

しかしこの方途は、われわれにおいて、この通念を徹底化するという、さらにその枝葉を取り除いた、いわば剥き出しの形態をとる。つまり、デカルトは近世哲学の起点ではなく、むしろ起点であると同時に終点でもあるという意味で、すな

さてこのようにして、〈近世哲学とはなにか〉という問いがわれわれ自身によって真実に立てられ、いわばそれによってわれわれ自身が貫かれ、その答えが模索されなければならないにしても、むしろそれにはさまざまな方途が考えられる。しかし同時に、考えらうれる限りの選択肢の中心にあつて不動の座を占めているのが、近世哲学を近世哲学として

——つまり、それがそもそも成立するべ

わち、それが彼以降の哲学がそこで生きるための土壌であるという意味で、いっさいをデカルト的思惟において見ようとする、という形態をとるのである（因みに言えば、このことが実際に試みられた例は、本書の続編を除いては存在しなかった）。

## 二十

だが、むしろこのままではわれわれは

不徹底という非難をまぬがれない。その非難をしりぞけて論旨を一貫させるには、まさにこの同一の問題圏のうちに、デカルト的思惟そのものが見直される必要がある。いわばデカルトがデカルト自身へと還元される必要があるのである。しかし、こうしたことをわれわれがここでおこなうまでもない。なぜなら、本書のうちにわれわれが見出すのは、その試みのきわめて徹底されたかたちでの遂行にほかならないのだからである。

## 二十一

すなわち、そこから考察が始められるべきデカルト的思惟の最内奥の問題とは、〈時間〉の問題なのである。時間といつても、それは哲学的思惟に固有の時間のことである。言い換えるならば、哲学的な思惟が真に哲学的な思惟として生起するとき、それが生起するまさにその有り様を何らかの秩序が支配しているとするならば、その秩序とはいかなるものなの

か、という問題である。したがって、この時間は考えられたもの、思惟されるものとしての時間ではありえない。思惟がそのなかを生きていく時間であり、それなしには哲学的思惟が哲学的思惟であることができないようなものとしての時間なのである。本書の著者は、評者の解するところでは、その問題をデカルトにおいて、その方法の問題として追求しているのである（「デカルト的方法についての試論」）。

## 二十二

だが、われわれはこのことを近世哲学に固有の問題として理解しようとしているのではなかったか。然りである。それならば、ここに明るみにもたらされているのは、近世哲学固有の《エレメント》でもある、というのでなければならぬだろう。すなわち、近世哲学が、いま述べたまさにこの秩序を自己自身に与えるようなものとして自らを産出する、とい

うことが、それゆえ、端的に言って、近世哲学がこの企ての反復として成立している、ということが明るみにもたらされている、というのでなければならぬだろう。

## 二十三

しかしそうすると、われわれが本書を、それを包含するさらに大きな問題圏のなかに位置づけ、そのなかで論じようとしていることが、要するに、われわれが本書の問題圏のうえに、さらにそれを覆う別の問いを交差させようとしていることが、ここに至って露呈せざるをえないであろう。はつきりと言おう。この別の問いとは、固有の時間を持つものとしての哲学史の起源への問いである。言い換えるならば、歴史一般ではなく、哲学史に固有な時間を自らに与えるものとして、したがって自己のうちに哲学史の起源を含むようなものとして自己自身を産出するもの——まさにそのようなものとして

の近世哲学への問いなのである。その背後には、これまでわれわれは哲学史というものをいかなるものとして理解してきたのか、ということへの反省が潜んでいる。その意味では、われわれの論述の最後の基底をなしているのはこの反省である、と言ってもよいかもしれない。

## 二十四

しかしながら、このわれわれの最後の問い、すなわち〈近世哲学とはなにか〉という問いから見ても、そのなかにドイツ観念論的思惟が、あるいはむしろ、カントおよびポスト・カント的思惟が、どのように位置づけられるのか。また、それがいかように位置づけられるにしても、その場合にわれわれはなお、われわれ自身がそれである、あの巨大な連関の中心にとどまりえているのか。——ここではどうしてこれらの問いに答えることはできない。なぜならば、そのこととわれわれがわれわれの論述を具体的に展開する

こととは別のことではなく、そればかりか、これらの問いの存立そのものさえもが、われわれの論述に懸かっているのだからである。

## 二十五

さてこのようにして、われわれはいわば、本書の内部を支配している重力の束縛からいったん自らを解き放ちながら、逆にその内部にいつそう深く解釈のための固有の出発点を穿ち、そこを足がかりとしてこの懸崖をよじ登ろうとする。もちろんその一つ一つの歩みにおいて、われわれは〈時間〉の問題を、さらには〈観念論〉と〈合理主義〉の問題をめぐる、著者の思索との格闘を避けることはできない。そしてその彼方にわれわれは、すでに本書の著者のたどり着いていると言われる最後の境地を——合理主義にとつてロマン主義が背理とはなりえないと言われるその場所を——垣間見ようとする。しかし、もう一度言うが、たと

えそうだとしても、われわれにとつて、いつさいは〈近世哲学とはなにか〉という問いのなかでのごとであり、またそうでなければならぬのである。

\* \* \*

すでに冒頭でも予告していたことであり、さらにまたその内容を見れば一目瞭然ではあるが、本稿は、本来の意味での書評の任務をまったく果たしていない。せいぜい、その序論とでも言うべきものをかろうじて展開しえたにすぎない。だが、それが実際に書かれるかどうかは別に、この準備作業なしには、つまり、ある書物を評するためにまずはそこへ到達するという作業なしには、書評をおこなうという企てそのものが不可能となりかねない場合がある、ということもまたあきらかなのではないか。

もっとも、たとえいかなる事情があるにしても、そのために、序論部分から本

来の意味での書評への移行を成し遂げようとする、まさにその地点で叙述を中断するという行為までもが正当化されうるわけでは、むしろない。これはひとえに評者の力量不足に由来するものであり、素直にお詫び申し上げるとともに、さらなる叙述の継続を——それがいつどのようなかたちで実現するかはいまは申し上げられないにしても（つまり、それが同じ書評というかたちで遂行されるとはかならずしもかぎらないにしても）——約束したい。